

Title	伊東米治郎著 日本の海運
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.2 (1923. 2) ,p.309(151)- 310(152)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230201-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高島佐一郎著

金融經濟の諸問題

菊版 本文 五八六頁

英文附録、序文、目次等、實文館發行

定價 金 五圓 五十錢

本書は名古屋高等商業學校教授高島佐一郎氏が最近約二年間に亘つて、公にしたる論文を蒐録して、書籍の形體としたるものなり。題して單に金融經濟の原理と稱すれど、内容は金融經濟を論じたるものと、評傳批評に關するものと、の二部に分たる。前者の内、著者が最も多くの精力を費したりと思はるゝは、第一編「再論米國聯邦準備制度の運用」と云ふ一章にして、曩に世間に問ひたる「聯邦準備制度調査」の後を承けて、合衆國銀行制度の如何に運用せられつゝあるか、歐洲戰時に起れる變動に依つて、如何なる影響を蒙れるかを種々の方面より研究し、結局近時各聯邦準備金銀行の所在地に依つて、營業上の狀況の異なることや、十二銀行の併合に

る回想録を添へたり。是等の内、ラフリン氏の「貨幣及び物價」に對する批評最も深刻にして、精彩の豊なるを認む。高島氏の紹介したる著書を既に讀了したると否とに拘はらず、氏の紹介文を通じて、益する所少なからざる可し。著者の曩に公にしたる金融關係の著書と共に、本書亦金融專攻者に取つて、價值ある一資料たるを得べし。(堀江歸一)

伊東米治郎著 日本の海運

東京實文館發行

四六版二七五頁附録五八頁

定價 金 二圓 三十錢

本書は、表題の示す通り日本の海運を主題として、其の發達と現状とを叙し且つ今後に於て之に關して採るべき手段政策を論じたものであつて、現に日本郵船會社社長の任に在る伊東氏の筆に成つた新刊書である。

本文は四章から成つて居る。第一章に於て日本海運の太古より歐洲戰亂中に至るまでの沿革

關して議論の起りつゝあることを擧げて、全編を結べり。約八十頁に近き論文にして、米國銀行制度研究者に取つて、指鍼たるを失はず。第二、第三の兩編は事業經營の形式と金融機關との關係を論じたるものにして、マーシャル氏の Trade and Industry に於ける研究の成果を利用し、評論し、傍ら企業に關する最近の事實を收容し、殊に第三編に於ては、對外債權に就て、内外諸國の時事問題を論評し、第四編に移りて、金融組織に關する諸問題を概括し、第五編に於て我國銀行組織の缺陷を指摘したり。其中に於て、我國銀行界を通じて、集中運動の行はれざるを難じ、又小口當座預金、定期預金に重きを置くの事實を擧げたるが如き、最近に起れる我國銀行界の破綻と對照して、興味を覺ゆるの議論とす可し。

第二部に蒐録せられたるは、著者が最近讀過したる貨幣金融關係の新著に對する評論若しくは梗概の紹介を主なるものとし、故大西猪之助氏并にサー、イングリッシュ、バルグレイヴに對する發達を外形的に叙し、第二章に於て海運補助の理由と方法とから始めて我國に於ける航路並に航海に對する補助の沿革、造船並に海員に對する保護施設の沿革を述べて國家的施設乃至は援助の跡を示し、第三章に於て、斯くして發達し來れる本邦の海運は如何なる現状に在るものなるやを種々の方面から叙述して其の世界に於ける地位を明かにして居る。然るに此の地位は、假令近年急速に向上したとは云へ猶ほ且つ不充分なる所が少なくないから、此の地位を維持し進んでは更に之を向上發達せしむるの手段を講ずることが必要になる。是れ第四章「日本海運の將來ある所以であつて、思ふに此の章が本書の眼目」とする所であらう。即ち第一の節に於ては海運の維持發達の方策を論ずるのであつて、「海國政策の要諦」として「本邦海運の國際化」を擧げ、特定航路の確立と之に配すべき優秀船建造の要を説き、此の目的の爲めに直接間接に國家的保護を與ふるの必要あることを論ずる。第二の節に於ては海員の保護養成の爲めには如何

なる手段を採るべきかを示し、更に第三の節に於ては一兩年來屢々問題となつた所の船舶合同に關して其の利害、方法、實行の徑路等を論じて本文二百七十五頁を終つて居る。而して五十八頁に亘る附録には、本邦に於ける主要汽船會社十社の沿革、現状が述べられて居る。

全篇を通じて平明流暢の筆致を以て事實を叙し事理を語つて居る點、特に「お手のもの」の豊富な材料を巧みに使ひこなして本邦の海運を取扱つて居る點は本書の長所とする所である。唯、一般國民の經濟生活と關係深きコンフェレンスの本邦を中心としての實狀が毫も之によつて窺ひ知られなかつたことは幾分失望せざるを得なかつた所であるが、然し一と通り海運に就ての豫備知識を有する者にとつては勿論、全くの門外漢にとつても、一個の有益なる書み物たるを失はない。私は元來、鐵道や其の他一般の交通の如く、技術や實務と深い關聯を有するものに關しては、實際家の知識に待つにあらざれば了解充分なるを得ざるものがあるにも拘らず、從來

授は挺身この至難の業にあたり、續々その研究を「經濟論叢」に寄せ、我が學界に於いて殆んど未拓の境地に就き多大の貢獻をなしつつあるは、畏敬措く能はざるところである。

助教が如何なる問題を取扱ふに方つても、頗る用意周到にして然かも陥り易き左顧右眄の弊に墮せず、信ずるところを直截に披瀝して遲疑せざる鋭敏の筆鋒を以つてするは、一度その所論に接したるもの、容易に首肯するところであらう。本書収録する雄篇十七、而して論ずる範圍、國民所得分配状態の測定方法、我が國に於ける國民所得の發達及び地方分布、「國富統計」批判、所得税均等負擔の問題、累進税の公平犧牲説に關する統計的觀察、租税負擔の地方別研究、新所得税に關する武藤氏との論争、生計調査論と之が二種の實地調査の報告、物價騰貴と通貨との關係並びに之に關する福田博士との論争、指數論、兌換券發行額に關する二論文、孰れも出色の文字たらざるはない。然かも篇中隨所に利用せられたる統計が、乏しき資料を索

我國に於ては實際家の此の方面に於ける活躍を見るに至らざりしことを豫てから遺憾として來たのであるが、今、伊東氏の此の著書に接して豫ての希望の一端が充たされて愉快の念を禁ずることが出来ない。私は之を機會として爾後益々多數の實際家の間から此の方面の著書の續出するに至らむことを希望して已まないものである。(増井幸雄)

沙見三郎著 經濟統計研究

菊判三六六頁附録五七頁

定價金三圓八拾錢

内外出版株式會社

經濟學上の諸問題を論ずるに方つて統計的研究の忽せにすべからざることは久しく唱へらるゝところであるが、我が國に於いてはその反響を傳へるものが洵に乏しい。これは一には據るべき資料の尠いことにも原因してゐるであらうが、また一にはこれを行ふことの容易でないことにも原因してゐると思ふ。然かるに沙見助教

ねて苦心したる結果なるを知るに於いて、眞摯なる助教の研究に對する畏敬の念は更らに深からざるを得ない。

新たに上梓して世に問ふこの論文集を手にし「高尚なる事實を捕へて幽玄なる理論を説く事は其任にあらざるを自覺してゐる。茲に於いてか手近にある平凡なる經濟現象を研究の對象として統計的研究を試みる事を自己の學問的態度と定めたのである」といふ謙讓の裡に藏するその抱負を窺ひ、切に將來の寄與を祈つて已まない次第である。(園乾治)